

# 犬にみられる母子相互作用

馬場 一雄 (日本大学)  
森 永良子 (伊豆通信病院)  
上村 菊朗 ( " )  
佐藤 能成 ( " )  
岡野 恒也 (静岡大学)

## はじめに

群としての社会生活を営む動物の母親の養育は、生命の維持という、生物としての基盤にたつものと、群としての生活を営むための導入をすると考えられる。

乳幼児期の子どもと母親の関係は、子どもの発達(理解・言語・自律・社会性・他)に影響をあたえる。

人の母子関係を考える上で、犬の母子関係の実験および観察は、示唆に富むものがある。

昭和55年度は、犬の母子相互作用の実験として子犬の隔離飼育をおこなった。

母親の養育態度、子犬のattachmentの相互作用は、母子のおかれた条件によって差があることを経験した。

今回は、障害をもった子犬を養育する母犬を観察する機会をもったので、障害児と母親の母子関係との関連で、考察を試み報告する。

障害児の親の養育態度を規定する要因は、子どもの障害のタイプ・程度、親のパーソナリティ、家庭の経済的な背景など複雑である。

しかし、健康に育っている子どもに対する態度とは、あきらかに差がある例をしばしば経験する。

障害児の母親の養育態度は、極端に拒否的であったり、過保護で共生状態にあるものなど様々である。

動物の母子関係をみると、障害をもつもの、虚弱な子どもへの養育態度は、遺棄、拒否などが一般的な傾向といえる。平岡(1980)は虚弱な子犬を拒否し養育しなかったシェパードの母犬について報告している。

しかし、傷を負ったり、虚弱な子どもを保護する母動物のなほは、語りつがれ人々に広く知られているのも事実である。

出産直後に死亡した子犬を観察することが多い

が、母犬の態度は同一ではない。動物舎内で出産した子犬の2週間後の生存率は、約70%であるが、死亡した子犬にまったく関心を示めさず放置する母犬もある。一方、死亡した子犬を喰わえて、体内にだき込み子犬を離なそうとしない母犬もみられる。

障害犬の母犬は、ダルメシアン種5才、チロで、2回目の出産で、後の障害犬を出産した。(1回目の出産で出生した5匹中、3匹は隔離飼育の実験をおこなった。)表参照。

♂1匹は、里子に出し、♀2匹が母犬とともにケージ内で飼育され、順調に生育した。うち1匹は、その後15週目に脱肛による感染で死亡した。まもなく、残った1匹も脱肛をおこし、排汗も困難となり(16週)生存が危ぶまれた。写真①

母犬は、子犬が脱肛をおこし、排便が困難になると、子犬の側を離れなくなり、排便の援助、患部をなめるなどの養護をおこなうようになった。同時に餌をゆづりあたえ、行動を共にするようになった。

母犬、チロの脱肛の障害犬に対する態度は、健康に育った子犬に示した態度とはまったく異っていた。

母犬は、普通、生後6~8週間までは、子犬の排泄の援助をおこなう。(Scott, 1965)その後、排泄は徐々に自律し、3ヶ月を過ぎると、ほとんど排泄の援助はみられなくなる。(隔離飼育された子犬は2週間で排泄は自律した)

チロの健康な子犬における排泄の援助は、3ヶ月にはほとんどみられなかった。

脱肛の障害犬は、一時、排泄も自立していながら脱肛をおこしてから、また、母犬の援助を受けるようになった。母犬と、この障害犬は行動を共にするようになり、ケージ内でも、運動場でも、母犬チロが子犬の側を離れず、母犬の排泄の援助

を痛がる子犬が観察された。

子犬が排泄する時は、側に寄り、なきさけぶ子犬の排泄の援助をおこないむづかる子どもをあやす母親の姿がみられた。(写真②)。このような母子関係は、子犬が1才過ぎててもみられていた。

母犬チロの健全な子犬に対する分離は、食物からはじまったが、(生後3週間目にミルクを飲もうとする子犬を威嚇した)、障害犬に対しては、むしろ母犬が餌をゆづる姿があった。他の犬達には、威嚇して食べさせない餌も、障害犬とは一緒に餌箱から共にたべ、時には、さきにたべさせるなど、他の犬には示さない態度で接していた。

子犬が5~6ヶ月になると、群の中で他の犬に威嚇されたり、咬まれたりするが、この時期になると母犬は子犬を保護しなくなる。しかし、障害犬に対しては、1才4ヶ月になった現在でも他の犬の威嚇や、攻撃を許さず、障害犬を攻撃する犬に制裁を加えるなどの保護がみられる。

その後、母犬チロは3回目の妊娠をした。妊娠しても、母犬の障害犬に対する態度は変わらず、子犬をはなすと、母犬は他の犬を攻撃するなど着かない様子をみせた。

出産は、経験もあるので母子をはなさず、自然のままに放置した結果、障害犬を側に置いたまま8匹を出産した。

障害犬は、母犬の側に身を寄せたままであった(写真③)。

しかし、出産の翌日、出生した8匹が食殺されているという結果を生じた。

出産時の食殺は、初産に多いといわれている(平岩)。チロの食殺についての解釈は困難であるが、チロは妊娠、出産を忘れたように、障害犬と行動を共にしている。

この障害犬は、1才4ヶ月になる現在、発達もまだ十分ではなく、群の中ではもっとも弱い犬である。当然、最下位の位置におかれる犬であるが、母犬、チロの保護があるので、母犬が側にいる限り攻撃目標とはなっていない。

過去における子どもに対するチロの養育態度は、むしろ、淡白で分離も早かったが、障害犬に対しては、次の出産を経た現在も、母犬としての保護と養育をおこなっている。

## 考 察

母親の養育は、子犬の発達に対応して分離からはじまり、次の出産までに子犬との間に母子関係がみられなくなるのが普通である。

この過程を、Scottは、子犬の発達経過から観察している。

われわれの観察でも、純血種(ダルメシアン)、雑種ともに、離乳の時期から母子の分離がみられている。

母犬の養育態度はかならずしも同一ではなく、子どもに餌をあたえるもの、自分がさき食べるもの、子犬とあそぶ母犬、あそびの少ない母犬などの差が認められる。しかし、6ヶ月を過ぎると、純血種、雑種とも母子関係は稀薄となり、群の中の順位に従って行動するようになる。

今回の脱肛の障害犬は、母親との分離がはじまり、排泄の自立も完了し、群の中での生活が可能となってきた段階でおきた障害であった。

母犬の態度は逆行して、その養育態度は、食物の世話、排泄の援助、他の犬の攻撃からの保護など3週間~8週間の間にみられる養育となっている。

母犬、チロは、早期に(2週間~3週間)隔離飼育した子犬には、その後、母犬としての養育をほとんどしなかったが、母犬と共に行動していた障害犬には、歴年齢に関係なく保護と養育をつけている。

この例から、母犬の子犬に対する養育態度は、子犬側の条件によって規定されているといえよう。

母犬、チロの養育態度ならびに、子犬との母子関係は、子どもの条件(健全あるいは、障害、虚弱)により対応が異なり、子犬側も、母親に対してのattachment、依存の欲求を高める結果となっている。

障害児の母子関係も、障害という個体特性が、母親に歴年齢を無視した保護と養育態度をつくり、子どもは、その障害のために、よりattachmentと依存の欲求を母親に求めると考えられる。

一方、障害をもつ子どもは、母親にとって肉体的、精神的負担になるのは当然である。障害児は、発達年齢に応じた母親から独立するための基本的な能力(運動能力、理解・言語、社会性)が劣るので、attachment、依存の要求が強い。かつ、

要求は長期にわたるようになる。

母親によっては、肉体的、精神的、経済的負担にたえきれず、養育を放棄あるいは拒否するものがある。このような場合、障害児は、健常児以上に deprivation の危険にさらされると考えられる。

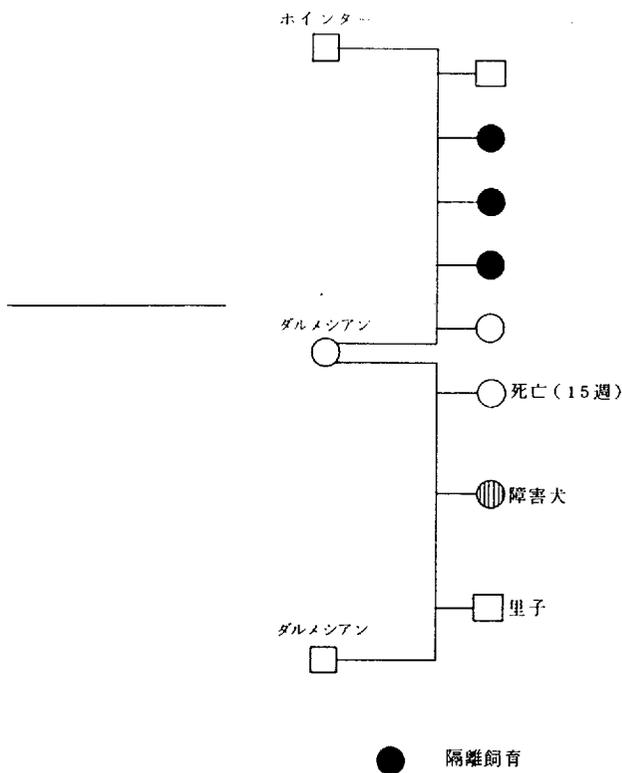
近年、障害児の母親の養育態度が変化しているといわれるが、障害児は母親への attachment 依存が強いのは自然の理であるだけに、障害児の母子関係は大きな社会問題を含んでいる。

動物である母犬チロの障害犬に示した養育態度は、動物における母子関係の一つのモデルを示

していると考える。

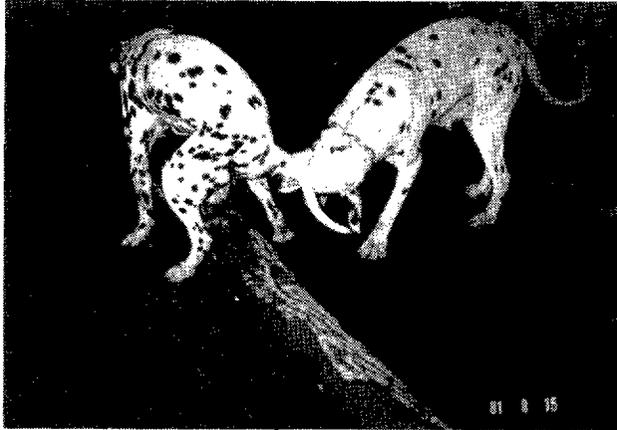
### 文 献

- ① Scott, J.P. & Fuller, J.L. :Genetics and the social behavior of the dog. Univ. of Chicago Press, 1965.
- ② Scott, J.P. & Ghett, V.J. :Development of affect in dogs and rodents. (Ed) Alloway, T.Communication and affect. A comparative approach. Academic Press. 1972.
- ③ 平岩米吉：犬の行動と心理。池田書店 1980

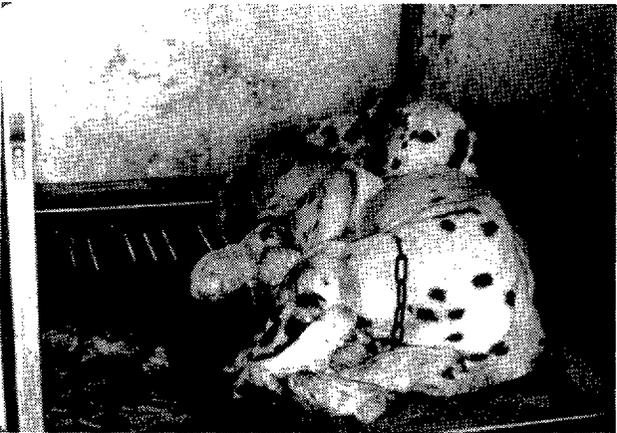




① 脱肛の障害犬



② 排泄の援助をする母犬



③ 障害犬を側において出産した母犬



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

群としての社会生活を営む動物の母親の養育は、生命の維持という、生物としての基盤にたつものと、群としての生活を営むための導入をされると考えられる。

乳幼児期の子どもと母親の関係は、子どもの発達(理解・言語・自律・社会性・他)に影響をあたえる。

人の母子関係を考える上で、犬の母子関係の実験および観察は、示唆に富むものがある。

昭和 55 年度は、犬の母子相互作用の実験として子犬の隔離飼育をおこなった。

母親の養育態度、子犬の attachment の相互作用は、母子のおかれた条件によって差があることを経験した。

今回は、障害をもった子犬を養育する母犬を観察する機会をもったので、障害児と母親の母子関係との関連で、考察を試み報告する。

障害児の親の養育態度を規定する要因は、子どもの障害のタイプ・程度、親のパーソナリティ、家庭の経済的な背景など複雑である。

しかし、健康に育てている子どもに対する態度とは、あきらかに差がある例をしばしば経験する。

障害児の母親の養育態度は、極端に拒否的であったり、過保護で共生状態にあるものなど様々である。